

[研究ノート]

上海市における「注音识(識)字，提前读(読)写」 教育改革実験の実態

曾 我 徳 興

- 〈目 次〉 一 はじめに
二 上海市実験校の訪問(座談会と授業参観)
三 上海市教育局の訪問(実験指導者へのインタビュー)
四 まとめ
五 おわりに

一 はじめに

「注音」は漢字のそばに表音文字をふるという意味、「識字」は漢字を覚えるという意味、「提前」は早めに、「読写」は読み書きという意味から、「注音識字、提前読写」は拼音字母つまり中国現行のローマ字表記法でもって漢字を覚えさせ、早めに読み書きができるように教育するという意味である。⁽¹⁾

中国文字(漢字)は表音文字ではないため、ある程度の漢字数を覚えておかないと、読み書きすることは到底望めない。したがって小学校の語文(国語)教育において「識字唯一」(ただ漢字を覚えるだけ)という教育がずっと主流になっているわけである。この「識字唯一」という教学法の単調さと内容の乏しさのため、生徒の学習意欲が低下し、3年生になっても漢字を活用することができないし、閲読のレベルも低い、作文の時間になるとほとんど立ち往生して前へ進めなくなる。この情況をつくった原因の一つは、1, 2年生の時に識字教育と同時に言葉(話し言葉, 書き言葉)の教育を強化しなかったため、3年生になってから問題が急に露呈したわけである。⁽²⁾

この認識に基づいて、黒竜江省は1982年から小学校語文教育のレベルを高めることを目的として、「注音識字、提前読写」の教育改革実験を行った。実験後まもなく、もう初歩的な成果を収め、教育界には大きな反響を呼び起こした。ちなみに上海の小学校は1983年から同様の実験を始めた。⁽³⁾

筆者は上海の同実験に関する状況を知りたいため、1985年6月下旬に上海を訪問した。上海では、「上海市閘北区一中心小学」という実験校を訪れ、授業風景を参観したり、座談会を開いたりした。その時はちょうど年度末試験の前に当たり、学校は生徒に自習時間を与えるため、授業はほとんど行われていなかった。しかし遠方からきた筆者のためにわざわざ3クラス計3コマを設定し、その授業風景を生で見せてくれた。その後上海市教育局(教育委員会)を訪れ、市教育改革実験の責任者である武先生に対するインタビュー等、上海市全般にわたりその教育改革実験の現状を一応把握することができた。⁽⁴⁾

今回は上海の教育改革実験の実態を座談会やインタビューを通して紹介する

ことにする。

二 上海市実験校の訪問(座談会と授業参観)

上海閘北区一中心小学(小学校)を訪問した後すぐ座談会を開き、曹静芝校長、陳文声先生(1年生の主任)、童敏良先生……等が列席した。

筆者：今回上海にきた目的は、上海における同実験の現状を把握するためです。実験校の実態をご存じの範囲内で結構ですから、話して頂ければ有り難いと思います。

曹校長：私達はこの実験を実施してからもう少して1年になるところです。昨年(1984年)の9月から始めましたが、効果がありました。1年生の生徒が1,500余りの漢字を覚えたからです。この実験をやるまで、生徒の識字量も少なく、閲読量もよくなかったのですが、今では、識字量、閲読量ともに前と比べればだいぶ高くなりました。しかも今の1年生は文章が書けるのです。

筆者：以前はほとんど3年生にならないと文章が書けなかったわけですね。

曹校長：前の2年生の「造句」(短文を作る)はほとんど「口頭造句」と言いますが、現在では1年生の前期からもう文章を書かせています。つまり読みと書きを同時に進行させたわけですね。過去においては、1,2年生の時は識字だけで、3年生になってからようやく作文が始まるという状態でした。現在の1年生には4週間で「拼音(字母)⁽⁵⁾」(ローマ字発音表記法)を修得してもらい、この拼音の基礎の上に400音節を掌握し、また、これらの音節を基礎に大量に閲読してもらいます。

筆者：「拼音読物」(ローマ字で書いている読物)は多いですか？

曹校長：本校ではこの種の読物は沢山置いています。約10種類あります。その上拼音雑誌や児童読物もとっており、生徒に読んでもらっています。ですから生徒の閲読量が広くなり、閲読量が広くなると知識が自然に高められ、理解力、思考力……等各方面とも開発されるようになります。この実験の効果は上々です。

筆者：黒竜江省の実験は確かに効果がありました。

曹校長：本校での実験も素晴らしい効果が見られました。

筆者：この先生方は黒竜江省へ見学に行かれたか？

曹校長：私達は行きませんでした。しかし上海は市が中心になって組織したもので、20 数校がこの実験をやっております。本校はその中の 1 校です。

筆者：この実験の仕事は大変でしょう。いろいろとご苦労があったと思いますが。

陳先生：本当に骨が折れますよ。

筆者：しかしご苦労の中にもきっと満足感が得られたでしょう。生徒が早くから文章が書けるその成果を見ますと、楽しいでしょう。

陳先生：それは楽しいですよ。苦労もいつのまにか忘れてしまいます。識字も普通クラスの学生より多い。書面上の表現及び口頭上の表現も皆良い効果を反映しています。私はここ 30 年間ずっと 1 年生を担当してきましたので、前の 1 年生はどうであったか、今の 1 年生はどうであるか、比較したらすぐ分かります。

筆者：前の 1 年生に対してどのように教えられたのでしょうか？

陳先生：前の 1 年生にも拼音字母(ローマ字表記法)を教えましたが、少し時間がかかりました。大体 7 週間を必要とした。教える内容も今より少ない。今は拼音知識を短時間で全部教え込むのです。前は一部の拼音知識を 2 年生の時に残し、例えば、ローマ字の大文字の問題及び比較的難しい拼音知識等がそれです。しかし現在の 1 年生には拼音知識を全部教え込むのです。

筆者：拼音知識を全部教え込むにはどのくらいかかります？

陳先生：約 10 週間、大体 1 学期の半分はかかると思います。教え方も過去とは違います。以前は bà の音節を「b」「a」「bà」と 3 回発音しましたが、現在は見たらすぐ「bà」と 1 回で読み出し、いわゆる直呼音節(直接音節を呼ぶ)の方法です。前の方法よりもこの方法が効果があります。始めて間もない時、確かに幾らかの困難にぶつかりました。この実験の要求が割に高い。子音 b、母音 a、その上四声「ˊ」, 一気にこの三つの要素を覚えることは、子供達にとって相当な負担になったからです。当初先生達が皆心配しましたので、毎日放課後

も学校に残って、補習をしました。時間が経過するにつれて、われわれは子供達がスタートした後まもなく効果が現れたことに気がつきました。したがって、われわれも少し自信がつき、この自信が次第に強くなってきました。

筆者：黒竜江省の実験効果と同じでしょう。

陳先生：効果は同じです。黒竜江省の実験のパターンをそのまま持ってきて、完全にこの地域に相応しいとは限りませんが、大体言えばまあまあ使えるということです。

筆者：私達の小学校時代は注音字母⁽⁷⁾を使用していましたが、ローマ字で表現すると、爸という読み方を教えるには、「b」「a」「ba」「bā」「bá」「bǎ」「bà」「bà」計8回を口にしなければなりません。それから「b」「a」「bà」計3回に短縮しました。しかしこの実験の教学法は「bà」1回しか口にしません。早期の8回から1回に変わり、時間を多く短縮したことは、大きな進歩であり、大きな成果を上げたと言えるでしょう。

陳先生：そうです。前は授業中「b」「a」「bà」、今は「bà」になり、手間をだいぶ省きました。この「bà」はどこからきたのですか？ これは声母(子音) b と韻母(母音) a の組み合わせの産物です。子音と母音の組み合わせは計400余りの音節があり、われわれは一つを教えたら一つを固める(しっかりさせる)。なにを教えたらなにを固める。最後に子供達が音節を見たらすぐ読めるようになり、難しいものも読めるようになりました。例えば、未だに出現しなかった形容詞のものも読めます。なぜかと言いますと、彼らは音節に対して非常に読み慣れているからです。

曹校長：ある字(ローマ字で表記した音節)に対して意味が分からなくても声を出して読めます。

陳先生：とっても難しい一連の言葉に対して、たとえその意味が理解できなくても、ローマ字表記法を借りて読めるようになりました。現在子供達は字、辞、句を区別することができます。例えば「大象」、以前は dà xiàng のように分かれていましたが、今や dàxiàng のようにくっついて一つの辞としてとらえています。

筆者：応用の面においては？

陳先生：1年生の時に最初彼らは音節で書きたいため、間違ったところも多かったが、次第にその誤ちが減少し、教師が彼らに漢字がわかれば漢字で書けば良いと言いましたので、徐々に彼らも音節の代りに漢字で文章を書くようになりました。現在は逆に漢字で作文している者は80%強もあり、音節(ローマ字表記法)で作文している者はわずか10%強しかいなかったのです。

筆者：まだ学んでいなかった字だけがローマ字で表現するわけですね。

陳先生：現在、1年生は辞書も使用できるようになり、2年生も1年生に及ばない。例えば、今の1年生は、部首の調べ方、音節の調べ方、分りにくい字の調べ方、筆画数の調べ方等ほとんどできます。昔、字が書けなかったら先生に聞きますが、現在、彼らはもう先生に聞きません。自分で辞書で調べます。辞書を引く興味が非常に高い。能力も高い。どの字も引き出せます。われわれも彼らに難しい字の調べ方を教えてやりました。

筆者：子供達の閲読量も次第に増加してきたと思いますが、読物の供給は問題ありませんか？

陳先生：そうです。子供達の閲読量はとても多いから、供給が需要に応じきれない状態でした。その後、われわれは意見を出して、市教育局(市教育委員会)がやっと材料をくれました。したがって、今年われわれはまた数冊の本を出しました。その他、子供達は新聞も読めます。

筆者：まだ1年生なのに新聞が読めるなんて、大人がびっくりするでしょう。

陳先生：拼音報⁽⁸⁾、幼児読物、青少年報、中国少年報……等ほとんど読めます。この外にわれわれは子供に相応しい刊行物も沢山とっています。その中にローマ字で注音していない漢字も読める生徒が大勢おります。覚えた漢字は結構多いようです。一番多く覚えた子供の識字量は1,995字です。

筆者：日本では小学校6年生までの識字量の要求は確か1,000字足らずですが、そうすると、日本の小学校6年生の2倍以上になりますね。

曹校長：もともと小学校の規定では6年生の間に3,000常用字を修得することですが、現在1年生をまだ終わっていない段階なのにもうすでにその規定の半分以上を越えてしまいました。

筆者：一番大切なのは、子供達が読める、言いたいこと、書きたいことを思

う存分書げるから面白くなる。読めば読むほど多くなり、書けば書くほど流暢になる。このように自然的に漢字も沢山覚えるようになることですね。

陳先生：ある時、われわれもわざと高学年の教科書を出して彼らに読ませます。彼らはほとんどその文章の中で何を言いたいのか、ということを理解できるのです。

曹校長：すなわち彼らは文章の中心をつかめるのです。比較的難しいものもほとんど理解できます。理解力は結構高いですよ。

陳先生：一篇の文章のテーマが出ましたら、われわれは彼らにこのテーマを見たら何を知りたいですか？ テーマがわれわれに何を言いたいのですか？ この問いに対して彼らはほとんど話せるのです。しかし、テーマと関係のないことにはほとんど触れません。

筆者：この種の実験はその他の科目、例えば算数や音楽……等にも良い影響を与えたでしょう？ つまり波及効果のこと。

陳先生：今まで算数の授業の時、応用問題が出てくると、まるで国語の授業と同じように先生が先ずその文の内容を説明します。そうしないと内容が分からない。勿論解答もできないわけです。現在はもうだいぶ違います。彼らは閱讀能力が高いから応用問題の内容がほとんど分かるようになりました。

筆者：音楽の授業にも与えた影響も大きいでしょう。

陳先生：その通り。以前、子供達は漢字が読めないため、曲ができてても歌詞が歌えません。現在、この拼音字母を利用して、彼らは曲ができたなら、歌詞も歌えるようになりました。1年生にも音楽の本があります。歌詞について、先生に教わらなくても、彼らは自然に歌えます。

陳先生：その外英語の科目も設けてあり、英会話も話せます。

筆者：本当？ これは驚きました。これは上海市が自身で考案したものでしょうか？

曹校長：いいえ、これは本校が自身で考案したものです。1年生については全体的改革の考え方から実験をやらなければなりません。

童先生：確かに外国語も小さい時から訓練を受けた方がよい。アメリカでは同時に3カ国語や4カ国語を教えている学校があると聞きました。子供の吸収

能力、理解力とも極めて高いのに、通常われわれ大人の目から見ると、いつも過小評価しがちになります。ある事柄に対して子供の思考力も大人に負けないくらいですよ。

陳先生：過去の時期において、教材が限られているため、多くの生徒が能力を発揮することができなかった。教材が少ないから、彼らの知識を求める欲望を満足させることができず、新しいものを学びたくてもできなかった。現在教材が多くなり、特にこの「拼音」の学習用具を彼らに教えた後、彼らは自分で学習し、自分で発揮するのです。多くの生徒が読めば読むほど上達しました。

童先生：以前の教材は「統編」のものですから。

筆者：統編の意味は？

童先生：全部統一という意味。即ち全国統一して編集した教科書を指しています。これは吸収能力が比較的に低い農村地を対象にして編集したもので、都会の子供には必ずしも当てはまりません。なぜならば、都会地には幼稚園や保育園があるから、教育の基礎がしっかりしていて、レベルも高い。統編教材は彼らにとってはお腹がいっぱいにならないからです。現在、彼らは拼音用法を修得し、この用具を利用して、辞書を引いたり、課外読物を読んだりして大いにその能力を発揮することができました。

曹校長：この拼音の用具を利用して彼らは自分で「課文」(教科書の中の本文)を読むことができます。

筆者：実験クラス用の教科書をちょっと見せて頂けませんか？

(陳先生が教科書を出して筆者に見せながら)

陳先生：教科書の課文は一組一組になっていますが、一組は四つの「課目」(課題)が設定されています。これは「読講課文」で、後には練習がついております。

筆者：読講の意味は読んだ後、生徒に話してもらい、または発表してもらうということですか？

陳先生：その通りです。字、辞、句等を皆掌握しなければならない。これらの字、辞、句を読んだ後、3節を教えます。皆注音(漢字のそばにローマ字で表記する)したものです。一篇は相当長いですから3節に分け、第3節になるとある

漢字はもう注音していません。1節を教えてそのまま3節を導くような形になっています。(またその教科書のページをめくって見せながら)昨年1年生の前期では進度が早くて、僅かな時間で以ってこのように沢山教えなければなりません。練習も多いし、課外の読物も教えなければなりません。このような設定は何教室あったかなあ……

曹校長：前は2教室だった。

陳先生：今年は少しゆるやかで3教室になりました。去年は2教室だけで終了させた。

筆者：ここでの2教室の意味は？

曹校長：2教室即ち2コマです。1教室は40分に等しいから、3教室だと120分にあたります。

筆者：全般的に言うと、実験前よりも時間をかなり短縮したわけですね。

陳先生：その通りです。学習した内容が多く、時間もかなり短縮した上にとっても効果があがりました。

曹校長：ほかに説話課(話をする科目)と写字課(字を書く科目)が設定されます。

陳先生：作文のための説々写々(話をしたり、書いたりする授業)は2コマ、写字課は3コマ、つまり週に5コマだけでこの2冊大きな本を消化しなければなりません。その他課外閲読は3コマ、そのうち聴々説々(聴いたり、話をしたりする授業)は1コマ、説々写々は2コマ、プラス3コマの写字課、計6コマです。しかし字を書く時は、その内容と一定の規律があります。写字に関しては幾つかの新しい教材があります。(その教材も見せてくれました)

筆者：先生方はこの教育改革実験にたずさわっている間に難しいと感じたことがありますか？

陳先生：あります。一つは教材の着くのが遅かった。教材がついていけない状態でした。今のクラスは第2順ですが、第1順の生徒はもう2年生になり、夏休み過ぎたらもう3年生になろうとしています。

筆者：(実験用教科書を手にして)これは全部上海市が自身で編纂したものですか？

曹校長：そうです。

筆者：黒竜江省の実験用教科書と同じですか？

曹校長：いいえ、黒竜江省のものと違います。

童先生：これは上海の実情にあわせて編纂したものです。黒竜江省の子供は家にいる時は普通語⁽⁹⁾(標準語、つまり北京語)を使っていますが、上海の子供は家にいる時は上海語⁽¹⁰⁾(方言)を使っています。したがって教材の編纂上、“就地取材、就地使用”(その場で材料を集め、その場で使用する)ということにならざるをえないからです。たとえのことですが、もし、この教材を日本にもっていっても、そのまま使えるとは限りません。やはりここの教材を参考にして日本の風土に相応しいものを再編纂しなければならないと思います。

筆者：先生方の見方だと、たとえ生徒が拼音字母(ローマ字表記法)を覚えたとしても、覚えた漢字も増えつつあり、漢字が増えてくると黒竜江省の実験と同じように、彼らはもうローマ字を使わなくなるのでしょうか？ 一般的に言えば、中学生になるともうほとんど使用しなくなりますが。

陳先生：もともと拼音字母は漢字を学ぶためのつえであり、歩けるようになればもう必要がなくなります。

童先生：拼音字母は漢字を学ぶ懸橋と言われています。

陳先生：識字量の制限によって、子供達が話ができて書けませんが、これは大きな矛盾です。現在は拼音字母を利用して、彼らは話せたら書くことができます。漢字が分からなかったらローマ字で表現すればよいわけです。

筆者：文字改革の観点から見ると、中国文字拉丁化⁽¹¹⁾(ラテン化つまりローマ字化)思想は中国文字を全部拉丁字母(ローマ字)に切り換えていく考え方です。一体これは可能でしょうか？ 先生方のお考えを聞かせて下さい。

童先生：中国語が英語のように全部ローマ字を用いることですね。

筆者：現代の文字改革思想は中国文字拉丁化思想です。しかし現在の状況から見ますと、皆様が漢字を覚えたらずいんどこれを放棄したがりません。勿論漢字にも優點があつて、例えば閱讀にいいとか、美感的であるとか等挙げられますが、その他にやっぱり漢字に対する中国人の愛着が漢字を放棄しない主要な原因ではないでしょうか。これは私個人の見方ですが、皆様方の考え方はい

かがですか？ 現在台湾の小学校1年生は3冊の教科書を使用しています。第1冊は全部注音字母(漢字筆画式の表音文字)で書いてありますので、漢字は1字も載っておりません。使用している表音文字はローマ字でないにしても、原則としてはここの改革実験と同じ意味です。

曹校長：われわれも同じで第1冊には漢字が入っていません。

筆者：台湾において、5年生になるともう注音しません。中学生以後、注音字母はもうほとんど使用しなくなります。

陳先生：ここも大体同じです。

筆者：ここ数年日本の当用漢字や常用漢字が増えつつあります。多分表音文字で以って解決できない同音字(同音異義字や同音異義語)の問題を漢字に手助けを求めているのではないかと思います。なぜならば、視覚上で同音字を区別するには漢字よりもよい方法は未だに見当たらないからです。特に中国の漢字には膨大な同音字をかかえているため、ローマ字だけを使用するとこの問題を解決することはできません。又中国語特有の四声(声調)があるため、もしそれを区別しないままで使用すると、その同音字の数はもっと多くなるでしょう。したがって私の見たかぎりでは先徒も漢字を一旦覚えて、読める、書ける、ようになったら、拼音字母の必要もなくなってきます。実際黒竜江省の教育改革実験においてもこういう傾向が見られます。以上幾つかの理由から見ると中国人は恐らく漢字を放棄しないだろうと私は思います。

曹校長：今のところは放棄しないと私も思います。その後は……

童先生：この教育改革について、新聞にちょっと載っていましたが、2,3年試して見るだけで、そのまま決まるとは思いません。いまはこの実験がうまくいっているが、今後推し進めていくかどうかは定かではありません。

曹校長：現在はまだ実験段階です。

陳先生：今年は一部分広げたが、これは能力、教材……等の諸条件を見まさんと。昨日私は培訓(教員の質を高める講習会)から帰ってきたばかりです。

童先生：それは主に教師を養成するためです。一部分の新米の教師は学歴が割に低いし、経験もないし、まだ本人は教育方法についても新しく勉強しなければなりません。確かに教師がまだ欠乏しているので、すぐ全面的に広めてい

くのはちょっと無理でしょう。さきほど、貴方が漢字は大体まだ放棄されないだろうという問題については、これは新聞紙上での論争だけと思います。

筆者：二つの方向、つまり、一つは漢字を廃除する。もう一つは漢字を保留する。この前私は雑誌で北京大学教授が書いた文章を読みました。それはコンピュータと漢字に関する問題です。今まで、一般の人が漢字をコンピュータに記憶させるのは至難のわざであると思ってきたが、しかし漢字は直線を使用しているから曲線のローマ字よりも簡単であるとその教授が力説していました。

童先生：現在では漢字も記憶させることができます。私は現在これを研究しています。

筆者：これが一番重要なところだと思います。本来なら書く面において、漢字はローマ字よりも難しい。しかしコンピュータという最新の兵器ができてから、指1本でキーを押せば、全く書く必要がなくなり、そうすると、漢字をローマ字に変える必要も当然なくなるだろうと思います。

童先生：正にその通りです。コンピュータはいま中国において、初級の段階に入ったばかりですから、すぐ広げていくのは不可能だと思います。現在は中央政府関係のものだけがコンピュータを使っているが、まだ一般化していません。

筆者：コンピュータの漢字処理は直線または形を用いるのですか？

童先生：形と直線を用います。

筆者：しかし、ローマ字は曲線を用いる。これは漢字とローマ字の発想の異なる点です。

童先生：貴方の考え方からすると、もしコンピュータの角度から見ると、やはり漢字を保留した方が良いでしょう。

筆者：そうです。しかし、今回の教育改革実験から見ますと、拼音字母は初めて漢字を学ぶ人にとって非常に有益です。

童先生：その通り、初めて漢字を学ぶ1年生にとっては非常に良い道具です。

陳先生：1年生の生徒は拼音字母を読むのはわれわれ教師よりも速度が早い。

曹校長：また音節についても大人よりも早くマスターします。

陳先生：しかし、もしも漢字を読むとわれわれ大人の方が比較的に早くなります。

筆者：これは慣れの問題でもあります、その上漢字は視覚上同音字の問題が存在しないから閱讀には助かるのです。

陳先生：もう一つの原因は、われわれは前に教わった方法「拼読的」(音素一つ一つ分析して読む方法)であり、現在彼らは「直呼的」(音節を一気に読む方法)です。われわれは古い方法からなかなか抜けられません。拼音字(ローマ字)を見ると少し考えないと……。

曹校長：この前、教育局(上海教育委員会)の人が検査にきた時、読んだことのない文章を子供達に読ませてみました。子供達はその拼音字母に沿ってすぐ声を出して読みました。

陳先生：彼らは漢字が分からなくても、拼音字母が分かるから、すらすらと読めるわけです。以前のように漢字しか頼れるものがないと、知らない漢字が出てきたときは、途切れてしまい、続けて読むことができません。

曹校長：正直に言うと、始めてまもない頃は大変でしたよ。

筆者：先生達は本当にご苦労様でした。また二つの音節つまり「詞」(辞)について、例えば「我們」(Wómén)、彼らはほとんどその二つの音節を続けて書くことができるのでしょうか？

陳先生：彼らはもうすでに詞の規律を掌握したので問題はありません。それから標点符号(句読点)を沢山教えました。例えば、句号「。」または「.」、逗号「,」、頓号「、」、冒号「:」、問号「?」、感嘆号「!」等、彼らはもうほとんどそれらを運用することができます。現在、彼らの作文の中に、対話の冒号「:」を全員と言っていいほどうまく運用することができます。以前は3年生になってから教えていたものが、現在ではそのほとんどを1年生の教材の中に組み込んでしまいました。確かに、始めた頃、われわれも子供達が耐え切れないのではないかと心配しましたが、現在彼らが非常に順調にこの実験教育を受けているのを見て、われわれも安心しました。

筆者：この実験校の実験クラスは幾つありますか？

曹校長：1年生は3クラスだけですが、全部実験クラスです。

陳先生：本校の募集は普通学校と同じように子供を選ばない。もし選抜制度を取り入れたら、どうせ生徒の素質がいいのだからとその成果を否定されかねません。

曹校長：現在3クラスとも実験をしているから、比較する対照クラスがないことは一つの欠点です。

陳先生：余所の学校と比較する以外に方法はありません。

童先生：2クラスが実験クラス、1クラスが普通クラスにすれば比較ができるのに……

筆者：もし同じ1年生が、あるものは実験クラス、あるものは普通クラスになると家长会(父母会)は必ず騒ぎ出します。教育平等の立場から見ますと全部同じにした方が正しい。余所の学校と比較しても差し支えないと思います。

陳先生：現在父母が非常に喜んでおり、子供達も非常に楽しそうです。

童先生：現在政府は産児制限の政策を打ち出しています。子供は1人しか産めません。そうすると、親が子供の教育に対してもっと関心をもつようになり、教育の成果があれば親が喜ぶのも当たり前でしょう。

陳先生：以前は、子供が病気で休んだら、その後先生は必ず個人補習をしますが、現在では、その必要はありません。子供は家で自分で勉強してそのブランクを補うことができます。能力があるからです。これを見るとすごく嬉しくなります。

筆者：われわれ教師がいくらつらくても、学生の学習成果を見ると本当に満足します。ところでこの実験は今年初めてですか？

曹校長：そうです。本校は1年目で、来年もやり続けますよ。ただ、来年の要求は更に高度になるかも知れません。

筆者：機会があったら、来年もう一度参ります。

陳先生：この道をわれわれは今歩いているわけですが、正しいかどうかは分かりません。

筆者：私は間違っていないと思います。

陳先生：現在、上海市教育局はこの教育改革の培訓(教師のための養成訓練)をやっていますが、それはただわれわれ教師に大まかに話してくれるだけで、具

体的な方法またはどうやって実験するのか等、いわゆるこまかい事については、やはりわれわれ下層部にまかし、設計してもらい、実施してもらうことになっています。

筆者：また教育の観点から言うと、個別差異の問題があります。一人一人の特殊性があり、一地域一地域にもその特殊性がある。その特殊性を尊重する教育局の政策は正しいと思います。先生方の表情から推察しますと、皆様方がこの実験を楽しんでいらっしゃるみたいです。

童先生：陳先生は教歴の長い教師で、約 30 年のキャリアを持つベテラン教師です。

曹校長：彼女は教育界においてもよく知られています。

筆者：今日先生方にお会いすることができ、また、教育改革実験に関する貴重なお話を聞かせて頂き、誠に有り難うございました。また機会を見て参りますから、今後とも宜しくお願い致します。

曹校長：今度いらっしゃる時、早めに知らせて下さい。今回はちょうど試験の前に当たり、授業はもうほとんど終了しました。

筆者：本来 6 月中旬に来る予定でしたが、大学ではまだ授業があるため、大部遅れました。

童先生：彼は昨日の夜 11 時過ぎに着いたばかりなのに、今朝早くから仕事にとりかかりました。

曹校長：休まずですか？ 本当にご苦労様でした。

筆者：私はまだ若いですよ。皆様、本当に有り難うございました。

以上が座談会の模様ですが、その後、学校側の好意で、特別に 3 クラスを設け、この実験の教学を披露し、教室での生の授業風景を見せてくれた。つまり読み、書き、字引を使う順で授業したわけである。綺麗な声を出して読んでいる子供達の表情、端正に字を書いている姿、競争を取り入れ、如何に正確、且つ、早く辞書を調べるのかという緊張感溢れる雰囲気、どれ一つとってもびっくりすることばかりであった。いずれも普通クラスの 3 年生の前期の程度に負けないほどであった。もう一つ付け加えたいのは、この小学校は 1 年生から英

語を教えていることである。その授業風景をも見せてくれた。授業中英語の歌を歌ったり、生徒が机をたたきながらリズムを利用して単語を覚えたりする。基本的には書くよりも話し方に重点を置いていると説明された。小学校1年生から外国語を正規の授業に取り入れ、また簡単な英会話がしゃべれるなんて、これにもまたびっくりした。

三 上海市教育局の訪問(実験指導者へのインタビュー)

上海市教育局(教育委員会)に所属する武令儀先生はこの教育改革実験の責任者である。武先生は低学年教育に関して上述の陳先生と同じ30数年のキャリアを持つベテラン教師である。武先生は大変忙しい中に1時間ほどを設定して、筆者のインタビューに応じてくれた。

筆者：今回参りました目的は上海市の教育改革実験に関する実態を把握するためです。昨日聞北区一中心小学を訪ねた際、曹校長と陳主任の紹介で武先生を訪ねて参りましたわけです。先生はこの道のベテランであり、この実験に関することならほとんど知っておられると聞きましたから。

武先生：いやいやとんでもありません。

筆者：最初この教育改革実験を始めたのは黒竜江省で、2番目は上海市ですが、勿論上海市と黒竜江省は幾らか違うところがあると思いますが、その上海市の現状で結構ですからお話し頂けませんか？

武先生：それではかいつまんでお話ししましょう。1983年の夏休み、佳木斯(黒竜江省)の「注音識字、提前読写」の実験について北京で滙報会(総括報告会議)が開かれました。これは中央文字改革委員会が主催したものです。上海もその会議に参加しましたので、黒竜江省の経験が紹介されました。帰った後、われわれもこの実験を拡大しようじゃないかと思いましたが、上海は呉語(蘇州方言)地区に属し、普段は普通語(標準語)を使わないから北京や黒竜江省とは情況が少し違う。例えば「西紅柿⁽¹²⁾(xihongshi)」。われわれ上海は faga と発音します。したがって上海の言葉は普通語とかなり距離があります。教育部(文部省)が以

上のことを検討して、最後に呉語地区はもちろん、粵語(広東方言)地区でもこの種の実験を広げることに決めました。したがってわれわれ上海は1983年からこの実験を始めたわけです。

筆者：最初はどうでしたか？

武先生：最初は、範囲が割に狭くて、3区に3校つまり1区に1校の割合で実験を始めたが、1年やった後、子供の閲読能力が強くなり、直呼音節(音節を一気に読む)の速度も早くなったことに気がつきました。閲読能力が強くなったため、大量に教科書や課外読物を読むことができるので、彼らの知識も豊富になり、思考も活発になってきました。その外に、彼らの表現能力も強くなり、普通話の発音の面においても正しくなりました。それを見てわれわれは1984年に実験区域を9区2県計11区県まで拡大した。換言すれば、上海では11区県、23校、2,000名近い生徒がこの実験に参加しました。実験面が広くなり、生徒数が増えてきたので、教材を編集しなければなりません。われわれは一方教材を編集し、一方実験に力を入れました。時間があまりないため、われわれが編集した教材には幾らか問題が見られ、誤りも比較的に多いわけです。これが現状です。

筆者：この11区県の実験はもうそろそろ1年を経過しようとしているが、一般の反応はどうですか？

武先生：一般的な反応はすごくいい。なぜならば、子供の質、量ともに確実に高くなったからです。しかしわれわれは事実を正視しなければならない、つまり幾つかの問題があったような感じもします。最初の段階、子供には負担が重すぎた。これは設定された教材の内容が多すぎ、難しすぎたため、子供にとって消化不良の現象が起きたわけです。

筆者：では拼音段階はどうでしょうか？

武先生：われわれの拼音段階は以前の拼音段階よりも質、量ともに高くなりました。われわれは400の音節を増やし、彼らに「直呼」ができるようつまり音節を一気に読むよう要求した。しかしある教師は拼読法(音素を一つ分けて読む方法)に慣れているから、拼読法から直呼法に入る教師もいるが、拼音に対してうまく掌握している教師はすぐ直呼法を用います。ではこの拼読から直呼に

入るのか、それとも初めから直呼を用いるのか、これについても一つの調査報告がある。それは、能力が比較的低い生徒や吸収力が比較的劣る生徒に対しては、やはり拼読から直呼に入った方が掌握しやすい。しかし能力が比較的高い生徒や智恵が比較的発達している生徒に対しては、すぐ直呼から入ってもよい。教え方が正しくさえあれば問題はほとんど見られません。拼音段階においてわれわれは400の音節を増やしたが、その要求は直呼で読まなければなりません。われわれはまた純拼音(全部ローマ字のもの)の短文を設定しました。

筆者：それはなぜでしょう？

武先生：これは黒竜江省佳木斯の経験に学ぶが、われわれ上海も自身の特長があるということです。したがって黒竜江省の良いところを吸収し、例えば、彼らは先ず拼音の基礎を築き上げ、その後大量に閲読する。閲読過程の中で、漢字も自然に覚えるようになる。われわれはこれは良い経験であると思ったから、それを学んだわけです。拼音段階以後われわれ上海は独自に純拼音の短文30篇を設定した。これは以後早読みができるように基礎をつくるためです。換言すれば、拼音段階までは黒竜江省のやり方そのものを取り入れたもので、拼音段階以後は上海の特長を活かしたものです。それから30篇の短文の中にローマ字の大文字を覚えることも取り入れました。なぜかと言うと、1年の後期に辞書の使い方をも取り入れているからです(辞書はa b c……順で並べてあるが、最初の見出し字は全部大文字で印刷されている)。このように純拼音の教科書の中に、われわれはある言葉の知識をも取り入れました。例えば先ほど言った大文字の認識、隔音符号⁽¹³⁾(')つまり音節の区切りを示す符号の認識、軽声、また辞の続き書き……等すべてを取り入れました。したがって純拼音の学習が終わった後は言葉の知識に対して基本的にほとんど掌握したことに等しい。これから閲読が始まるのです。

筆者：閲読に関する教科書はどういうふうに設定されているのですか？

武先生：閲読に関する教科書の設定ですが、これは1課ごとに3篇の文章、つまり3課がくっついている。1課は主要な課であり、3篇はこの1課から発展してきたものです。3篇の要求はこの1課の要求とは異なり、1課は詳しく読講(読んだり、話したり)する課で、漢字の上にローマ字が全部ふってある。生

徒はこれを通じて、3篇の内容は一体一つの故事なのか、¹またはお伽話なのか、それとも普通の事柄なのか……等を自分なりに掌握するのです。このように1課が3課を引き出すように設定した目的は、主に子供達が教科書の中でも大量に閲読することができるということです。同時に又閲読の過程において、彼らは閲読しながら、漢字を覚えていくのです。換言すれば、正式の1課を読みながらその付帯の3課をも読みます。このように漢字が反復に現れる。つまり漢字の再現率をなるべく高め、この中から生徒が自分自身で漢字を掌握出来るようにするのです。このようにして前期を終わると生徒は、もう平均400～450の漢字を覚えました。

筆者：普通クラスの教材は何字ぐらいですか？

武先生：227字。

筆者：そうすると実験クラスは普通クラスよりも倍近く漢字を覚えたということですね。それはたいしたものですね。

武先生：生徒が閲読を通じて教科書ばかりではなく、課外の読物も読むようになるから、例えば上海教育出版社が実験クラスのために編集してくれた純拼音(ローマ字だけ)の、又注拼音(漢字の上にローマ字がふつてある)の課外読物等がそれです。このように授業中のものも課外のものも読むようになると識字量は予定の数字を遙かに越えています。しかしA生徒が覚えた漢字とB生徒が覚えた漢字とは必ずしも同じとは限りません。

筆者：1年前期の識字の400～450に対して、後期は何字ぐらいですか？

武先生：後期はまだ終わっていないので、統計をとっていませんが、推定では前後期つまり1年生の終了時点では約1,000字だろうと思います。

筆者：1,000字あれば子供にはもう文章が書けるでしょう。昔、初等教育で用された教科書、例えば千字文、三字経、千家詩……等はほとんど1,000字くらいで書かれたもので、1,000字くらいあれば文章が書けるという中国伝統の発想があるから……

武先生：一番基本的な常用字は大体700余字であるとわれわれは思う。しかし「小学語文大綱」の中には3,000字を規定し、それは1～6年の間に配分されているが、一番常用的なものはやっぱり700字でしょう。現在生徒はもう

1,000余字を掌握した。まだ統計をとっていないので、具体的な数字ははっきり言えないが、推定ではほとんどこの数字を越えていると思う。前期に一番多く覚えた生徒の数は平均 1,600～1,900 字、一番少ない子は 200 字、平均 400～450 字、推定数はこれをベースにしたものです。

筆者：音節について、彼らは 1 分間にどのくらい読めるでしょうか？

武先生：一番早い生徒は 150 音節。

筆者：漢字 150 字に等しいですね。

武先生：一般の学生でも平均 70～80 音節は読めます。われわれが設定した教科書にはローマ字ばかりのもの、或いはローマ字を主体に漢字をふるもの、または漢字を主体にローマ字をふるもの等が沢山あるから、彼らが常に読んで、常に接し、“慣れこそ上手”ということになるのでしょう。

筆者：以前は漢字を読めないと前へ進めなかった。現在では知らない漢字があっても、拼音字母を読めばよい。したがって彼らは読めば読むほど興味が湧いてくるし、興味があればあるほど多く読むことになり、この過程の中で漢字も自然に覚えていくのですね。しかし閲読段階において、つまづいたことがありますか？

武先生：もちろんあります。それは先に話したように彼らにとって少し負担になったこと。設定された内容が幾らか多すぎる。特に 400 音節の中の一部分が常に使われているものではありません。したがって今後われわれは、また継続的に改善し、教材をも改修しなければなりません。技術の面において、われわれも座談会を開き、教材を改修する準備をしています。

筆者：この実験を又続いてやっていくつもりですか？

武先生：もちろん。われわれはまだ実験し続けるつもりです。始めて間もない頃、教師も迷いました。習慣的な教え方をすぐ変えることはそれほど容易ではありません。例えば zhuang の直呼式だと、その中にある三つの音素「zh」「u」「ang」を分析しないで、すぐ総合的に一気に「zhuang」と読ませることは、方言地区の子供にとって確かに幾らか難しいものです。しかしある訓練の期間を経た後、やはりやれるように感じました。最初の頃は、生徒だけではなく教師も大変疲れたようでした。それは幾つかの要因がある。つまり、時間の関係上

われわれが編集した教材は比較的に難しい、長い、多い。挿絵も入れてないし、また出版社からの大きい掛図も一緒に組んでいなかったため、教材道具も教師自身が作らなければならないので、大変ご苦労があったと思います。その後、一步一步改善してきたわけです。

筆者：勿論これは実験ですから、ゆっくり改善して、将来は更に完全無欠なものになるだろうと思います。それでは書く方面はどうでしょうか？

武先生：この実験は「注音識字、提前読写」と呼ばれているので、読む面も早くでき、書く面も早くできました。われわれも又説話写話(話し言葉、書き言葉)の教材1冊を編集しました。

筆者：勿論拼音字母をマスターすれば、話したいことまたは書きたいことがあれば書けるのです。

武先生：それはそうです。われわれはこの話し言葉と書き言葉の教材を二つの部分に分けました。一つは聴説(聴いて話す)の教材で、これは生徒の聴く能力と話す能力を訓練するためであり、もう一つは説写(話して書く)教材。生徒が話した後すぐ書くという練習のためです。始めた時は一番簡単な句を書かせます。例えば一句の言葉「誰做什么？」(誰が何をするか)、「什么做什么？」(何が何をするか)、「誰怎么样？」(誰がどうするか)。「什么怎么样？」(何がどうするか)、「誰干什么？」(誰が何をしでかすか)、「什么干什么？」(何が何をしでかすか)等一番基本的な6種類の句がそれです。その後この1句を基礎にして段々2句や3句を書いたりして、多く書く、早く書くように要求していくのです。

筆者：書く段階において何か問題はなかったでしょうか？

武先生：ありました。書く段階で、多く読んだため、漢字も割に多く掌握しましたが、この中にも問題があります。それは出現した同音字、音近字、形近字等に対して幾らか混同している現象が見られました。

筆者：同音字は同じ発音で違う意味の字ということでしょう。

武先生：そうです。例えば、工人(労働者)の「工」(gōng)と老公公(おじいちゃん)の「公」(gōng)は皆同じ発音で違う意味をもっているが、本来なら老公公と書かなければならないものが老工工にしてしまい、また「象」(xiàng)と「向」(xiàng)、「做」(zuò)と「作」(zuò)等がよく混同してしまいます。

筆者：音近字は？

武先生：それは発音が似かよって意味が違う字，発音が同じでも声調が異なるもの。例えば，晴天の「晴」(qíng)と清水の「清」(qīng)は同じ発音ですが，前者は第2声，後者は第1声，声調が違うわけです。実際言えばこれも又形近字です。つまり形が似かよって，意味が異なる字です。

筆者：この3種類の字が混同しやすいですね。では普通クラスと比べればどうですか？

武先生：普通クラスの生徒も多かれ少なかれ混同しますが，実験クラスの混同している状態は普通クラスよりも深刻です。

筆者：それは何故でしょうか？

武先生：これは生徒が自分で読んだ後，教師の指導を受けなかったため，書く時に誤ったまま使ってしまうからです。この問題について，今後われわれは教室の中で生徒に「詞儿辨析」ができるように注意しなければなりません。

筆者：詞儿辨析はどういう意味ですか？

武先生：例えば，晴天，清水，事情……等の辞を通じてそれぞれの字の使い方方を分析して弁別することです。

筆者：これによって生徒は小さい時から同音字……等の区別がつくようになりますね。

武先生：このようにしてこの問題点を解決することができるでしょう。その外，教師はもう一つの問題点を発見しました。いわゆる格差の問題です。成績の良いものは特別に良い，悪いものはすごく悪い。この二者間の格差が大きすぎます。われわれの見方では，この格差を縮めなければならない。これが前提条件です。この格差が段々拡大すると，教育にはよくないことです。したがってわれわれは広い面積で質，量ともに高めていかなければならないと思います。

筆者：格差を縮めるには，漢字の数を少なくしたり，教材をやさしくしたりするのですか？

武先生：それもそうですが，他方，例えば，1クラスは40名の生徒がいるとすれば，この40名の生徒皆に一定数の漢字を掌握させなければなりません。もしも格差が大きすぎると、例えばA生徒が1,600字を掌握し，B生徒が僅か200

字しか掌握しなかったら、これはよくないことです。われわれが思うには、広い面積で質、量ともに高めなければなりません。即ち 40 名の生徒がすべて質、量ともに高められるべきです。理解力の高い生徒にとって腹がいっぱいになるよう、理解力の低い生徒にとっても食べて消化できるようにしなければなりません。

筆者：それは具体的にどうすればいいですか？

武先生：授業中理解力の低い生徒に目を向け、彼らにも多く発言する機会を与えなければなりません。又一个の問題を回答する前に先ず一遍練習させてからやってもらうというように、どの生徒にも心理的な準備をさせるのです。換言すれば、授業中、どの生徒にも訓練する機会があるように教師が気を配らなければなりません。

筆者：現在生徒の一篇の作文には何音節書けるでしょう？

武先生：最初彼らが文章を書く時、音節(ローマ字)で書いたものが割に多く、現在では、次第に漢字で書いたものが多くなりつつあります。現在ある生徒は 200 音節(1 音節＝漢字 1 字)余の文章を書けるようになりました。これも最初に日記を書かせました。しかし、この日記は強制的に書かせるのではなく、志願を原則として行わせました。書きたい人や或いは書く事柄のある人だけが書けばよい。これは 3～5 名を 1 組にして、その後 10 名まで拡大し、クラスの半数または全クラスまで拡大しました。このように生徒は段々書きたくなり、常によく練習をしているため、文章を書く段階にはもう幾らかの基礎能力ができました。

筆者：その他の科目への影響も大きいですか？ 例えば数学や音楽。

武先生：教育改革実験を実施した後、数学もついていけるようになりました。

筆者：特に数学の応用問題には大きな波及効果があったと思いますが……

武先生：応用問題について、以前は漢字で書いてあるため、生徒は読めないで、解答することもできなかったが、現在では拼音字母があるため、生徒は読めるし、意味も分かるので、先生の説明なしで自分で解答することができます。音楽の授業も同じと言えます。以前は、曲を教えた後漢字の歌詞を教えなければならぬが、現在では歌詞の教学はだいたい省略されました。生徒自身が

読めるから、曲に合わせて歌えるようになるのです。言い換えれば、拼音字母が多機能性の効果を発揮するからです。

筆者：生徒の情緒の面から見ると、彼らの欲望を満たすことができますか？毎日新しい知識を求め、毎日新しいものが脳裡に入ってくるが、生徒は皆活発になっているのでしょうか？

武先生：われわれは生徒が非常に学習が好きになり、新しい事物に対し、非常に興味が高まっていることを感じました。

筆者：教育の面ではこれが一番大切なことですね。

武先生：生徒は1冊の本を見たら、すぐ持ってきて読みます。例えば、現在の2年生(昨年に始まった実験クラスの生徒は今年で2年生になった)はもう沢山の故事の本を読めるようになりました。“三百六十五夜”や“Sūn jìn shù 爺々の故事”……等の本が好きです。つまり、生徒には好きで本を読む習慣が出来てきたわけです。

筆者：現在1順目の実験、つまり2年生の実験はまだ終わっていないでしょうが、覚えた漢字はどのくらいあるのでしょうか？

武先生：それは多いですよ。現在2年生の生徒は1年後期の時、もう1,900字を覚えました。

筆者：それは平均ですか？

武先生：平均は1,900字までいきません。約1,200字です。

(武先生は2年生の識字量をはっきり答えなかったが、筆者の推測では1,000字をたせばよい、つまり一番多く覚えたものは約2,900字、平均2,200字)

筆者：1,000字あれば文章が書けるようになり、2,000字あれば大人の新聞も読めるようになると思いますが。

武先生：生徒は拼音報(ローマ字だけまたはローマ字でふつてある新聞)、新民晩報が好きです。その他大人が読む解放日報や文滙報等も読めます。

筆者：2年生の作文はどうですか？

武先生：2年生の作文も1年生のそれよりも要求が高い。例えば写段訓練(文章の一区切り即ち短い文章を書く訓練)について、“語言大剛”によれば、これは3年生になってから初めて書くもので、現在では、2年生の前期からもうこの種

の訓練が始まっています。例えばカメラを持っているパンダの玩具を見たら、すぐパンダの外形を書き始めます。全部の内容をとらなくてもいい。

筆者：教師は口をはさまないのですか？

武先生：指導します。なぜならば、話し言葉を書く時は、上から下へと順序があるはずだからです。パンダがどういう帽子をかぶっているか、顔はどのようなものであるか、どういう服を着ているか、どういうズボン、鞋をはいているか、またカメラを持っている……等を書くのです。最初にこのようにパンダの外形を話し、これを教え、指導した後、生徒に書かせます。書いた後、どのように書いてあるかを互いに評価してもらうのです。それから次週にパンダが写真をとる過程を書かせます。これも1セクションの短い文章で、外の事は書かないで、その写真をとる過程だけを書けばよいのです。生徒の作文にこういう話があった「パンダがカメラを私に向けカチャとシャッターを押し、私の影をその中に残した……」

筆者：初めに「静」のものを書き、その後で「動」のものを書きましたね。

武先生：そうです。動のものですよ。このようにパンダが写真をとる内容そのセクションの中に納めました。1セクション1セクションで数回に分けて書くと、まとめれば1篇の文章になります。これは計画的に教学を進めたからです。あるものは先ず総合的に書いてから分析をしてもらう。例えば、秋の景色が素晴らしい、それから菊の花がどうでしたか……等のように、生徒が2年生の時から簡単に短い文章が書けるようにするのです。しかも教師の指導のもとに書くということです。そうすると学生の進歩も早いのです。

筆者：こう見ますと、教師はかなりのご苦労があったと思いますが。

武先生：教師はほんとうに苦労しました。これらの方法はほとんど新しいものですから。

筆者：実験用の教材はカラーではないですね。

武先生：以前、われわれの教材はほとんどカラーのものでしたが、現在では、新しく編集し、新しく書き、新しく印刷したため、まだカラーの絵を挿入していません。まだ実験段階ということもあって、ほかにまだ色々と問題があるようです。

筆者：どういう問題ですか？

武先生：生徒の字の書き方がよくないのです。又教材の中に幾つかの問題点があります。それは、閲読教科書の中で覚えた字を書き方の教科書の中で固めていかなければならなかったのに、当時、そこまで考慮しなかったため、書き方教科書の字と閲読教科書の字とを不統一にしまいました。これらの問題について、われわれも改めて修正しなければならないと思います。

筆者：そうすると、将来において中央統編教材と上海自身で編集した教材の間に格差が出てくるでしょうが、それでも構いませんか？

武先生：貴方の意味は？

筆者：上海自身で編集した実験用教材と中央が統一して編集した一般クラス用の教材の間に必ず格差が出てくるのではないかという意味です。

武先生：普通クラス用の教材についても、われわれ上海が独自に編集したものがあります。

筆者：上海では方言があるから、その地方性に適合しなければならないので、政府もそれを認めてくれますね。

武先生：そうです。われわれは中央統編の教材を使っていません。上海市自身で編集した教材を使用しています。これはカラーがついています。

筆者：ちょっと見せて下さい。

(武先生から教科書を渡された)

武先生：これは第1冊です。上海自身が編集して、上海自身で使用するものです。

筆者：四声(声調)と母音と一緒に教えるのですね。

武先生：これらは単母音です。これも方案(拼音方案を指しているか全国教学方案を指しているか定かではない)とは異なります。本来子音は21個あります。それはb, p, m, f, d, t, n, l, g, k, h, j, q, x, zh, ch, sh, r, z, c, sですが、現在では教学の便利上われわれはya, waの音頭であるyとwを子音として教えています。実際それらは子音ではなく、音頭です。それらを子音として教えると生徒にとっては便利なのです。

筆者：ya(ia), wa(ua)を見るとyはi音であり、wはu音であると分かります

ね。

武先生：したがってわれわれは y を子音の i として，w を子音の u として読むのです。yi のケースだと，子音 y 音は i，母音 i 音も i です。wu のケースも同じです。子音は単独に音節として成り立たないからです。

筆者：日本で中国語発音教育は大部分子音から始めています。しかし私は母音から教えています。単母音から始めると比較的教えやすい。もともと子音は無声音ですから，母音の手助けがないとはっきり聞こえません。上海も単母音から始めているのですね。これは正しいと思います。

武先生：ある教師も自分で教学法を改革して，単母音を教えた後，複合母 ai，ou，iu……等を教え，それから子音と組み合わせて教えています。そうすると組み合わせる範囲も広くなってくるのです。これは教師自身が教学の経験と教学の状況に基づいて一般教学法を改革したものです。

筆者：教科書順序の並べ方は？

武先生：われわれは次のように 4 段階を設定した。第 1，拼音段階，第 2，拼音識字段階，第 3，看图学词学句段階，第 4，課文段階。この拼音段階では先ず 23 個の子音，24 個の複合母音，次に 16 個の完全な音節を読ませます。以上これは拼音段階のすべての内容です。第 2 の拼音識字段階では勿論拼音を通じて漢字を覚えるが，拼音要求をしっかり固めなければなりません。この本の中でわれわれはここから 19 課までその訓練を設定したわけです。それから第 3 の看图学词学句段階に入ります。ある字も一つの詞(単語)になります。つまり単音節の詞です。言い換えれば，絵を見ながら単音節(漢字 1 字)や複音節(漢字 2 字以上の辞)または句をも覚えていくのです。最後に第 4 の課文(文章の課)段階に入りますが，課文の中には読講課文，閲読課文があり，後者は漢字の上にローマ字で注音したり，しなかったりします。以上は普通クラス 1 年生第 1 冊目の教科書の内容です。

筆者：今日は「注音識字，提前読写」の教育改革実験に関する上海の実態，普通クラスの情况及び武先生長年の教育経験に基づく貴重なご意見を聞かせて頂き，本当に有り難うございました。今日の収穫は実に多かった。心から感謝します。

武先生：どう致しまして、お構いもしませんで。

筆者：来年また中国に来るかも知れません。

武先生：その節、又是非立寄って下さい。

四 まとめ

以上、実験校である上海閘北区一中心小学(小学校)の授業風景や座談会、また、上海市教育局(教育委員会)の同実験の責任者武令儀先生へのインタビューの内容(実は普通学級の小学校をも訪問し、その学校の1年担任教師にもインタビューしたが、その状況は大体武先生の話の中から分かるので省略させてもらったわけである)を紹介してきたが、われわれは次のようにまとめることができるであろう。

1 実験の成果

① 拼音字母(ローマ字表記法)の教学について：普通学級が7週間をかけてやるものが4週間で完成した。pāを見ると今までは「p」「a」「pā」計3回口にしたが、現在では「pā」1回に短縮した。即ち拼読(分析)から直呼(総合)へと教学方法を変えたのである。1年を終えた段階では1分間150音節(漢字150字に相当する)平均70～80%を正確かつ流暢に読めるようになった。入学まもない子供にしては早いスピードである。

② 識字量について：普通クラスの1年生は漢字700字を覚えることが要求されるが、(実際普通学級の教師へのインタビューの中から前期500、後期300計800字であることが分かった)実験クラスでは平均1,000字を越え、一番多い生徒は1,900字を越えている。

③ 閲読能力について：閲読量が多く、新聞も読める。そのプロセスはローマ字ばかりのものから漢字にローマ字で注音しているものへと、最後は漢字ばかりのものへと移り変わっていくのである。ある生徒は大人向けの新民晩報や文滙報等も読んでいくくらいである。つまり閲読の速度と理解力の程度は普通クラスの2年生のレベルよりもずっと高い。

④ 作文能力について：1年後期になると、ローマ字で書く生徒が段々少なく

なり、漢字で書く生徒が増えつつあるのである。その割合はローマ字 10%強に対して漢字は 80%強である。又 200 字前後の文章を書けるようになった。これは普通クラスの 3 年生も到達できないレベルである。

⑤ その他の課目への波及効果について：今まで算数の応用問題は漢字で書いてあったため、ほとんど理解できなかった。しかし実験クラスではローマ字で表記されているので、ほとんど理解できた。故に学習意欲が高まり、成績もよくなった。音楽の課目も同じことが言えよう。今まで歌詞を漢字で書いたため、先生が口で伝授しなければならなかったが、実験クラスではローマ字で表記されているので、曲さえできれば生徒は自分で歌が歌えるようになった。つまり今まで低学年では必ず口で伝授するという古い問題を解決したわけである。

上述の成果を見ると大体黒竜江省の同実験と同じ成果を得たと思うが、上海の特有なものとしては次のものが取り上げられよう：

① 拼音段階では 400 音節を設定したこと。これは生徒に直呼の練習が多くできるようにするためである。

② 拼音段階以後純拼音(ローマ字だけ)の短文 30 篇を設定したこと。これは以後早読みができるようにする基礎をつくるためである。

③ 辞書の使い方をマスターしていること。辞書は a b c ……小文字順で並べてあるが、最初の見出し字は全部大文字で印刷されているため、ローマ字の大文字の勉強を早めにした。1 年の後期にほとんど辞書の使い方をマスターしている。

④ 各学校の特殊性を発揮させるためにその設計をある程度各学校に任していること。例えば、閘北区一中心小学には特別な英会話の授業が設けられている。

2 問題点

① 拼音段階の要求が高すぎる：例えば、zhuàng という発音を分析すると zh は巻舌子音、u は母音、ang は奥鼻母音、ゝは第四声、この四つの要素を直呼(一氣に読むこと)を要求されると、入学早々の 1 年生にとっては難しいことである。まして上海は黒竜江省とは異なって、方言地区であるため、生徒に余計に負担

をかけた。上海地区の教師が最初一番頭を抱えているのはこの問題である。

② 教材の問題：この実験の教科書は上海自身で編纂して自身で使用しているものであるが、第1順目(1983年)は3区3校しか実験しなかったが、第2順目(1984年)は急に9区2県に計23校まで広げたため、教材が実験のペースについていけなかった。例えば、教材の届くのが遅いとか、白黒だけで印刷してあるとか、挿絵も入っていないとかいろいろと問題点があるが、一番大きな問題点は、やはり内容が難しすぎる、長すぎる、多すぎる……等のため、生徒に幾らか負担をかけたことだろう。例えば拼音段階に設定された400音節の中には、一部分が常に使用されていないものがあるわけである。又語文教科書の中で覚えた漢字と書き方教科書の中の漢字が異なる。つまり、統一していないということも問題点として取り上げられよう。

③ 格差の問題：この実験が実施されてから、伸びる生徒はどんどん伸び、そうでない生徒との格差が広がっていくくらいがある。例えば1年生の後期一番多く漢字を覚えた生徒は1,900字もあったが、一番少ない生徒は200字しか覚えていなかった。これは上海のような方言地区の特有の現象かも知れないが、基礎教育の面から見るとこれは大きな問題である。如何にしてこの格差を埋めるのか、これは今後実験修正に与える一つの課題であると思う。

3 文字改革の観点から

文字改革の観点から見ると二つの問題点が挙げられよう。

① 漢字の問題：現代中国の文字改革思想(いわゆる中国文字拉丁化思想)は、「漢字の改革は二つの方面から進めて行かなければならない。一方では表音の新文字を作り、一方では漢字を簡略化する。漢字簡略化は表音文字が完全に行われるまでの過渡的なものである。これは表音文字と合わせて実施しなければならない。換言すれば、表音化制度が最後の目標であり、漢字簡略化は最終目的に至る方法の一つである。終局的には漢字を廃止し、表音文字(ローマ字のようなもの)でもってそれを代替することになる⁽¹⁴⁾」という考え方であるが、しかしこの実験の中心思想は漢字から離れていない。上海の教育改革実験の中から幾つかの例を拾ってみると：

a) この実験の中には写字課(字を書く授業)を設けている。これは生徒に漢字を正しく書き、しっかり覚えてもらうための授業である。

b) 生徒の作文をみると、最初はローマ字ばかりであるが、次はローマ字の中に漢字を挿入したりする。次第にローマ字が減り漢字が増えつつあり、最後ではほとんど漢字で書いてある。

c) 座談会の中でも、インタビューの中でも、先生方が一番強調していたのは生徒の識字量であり、つまり漢字をどのくらい覚えているのかということである。こう見てくると、座談会の中で先生方が言ったように、現時点において漢字を廃止することは到底できないだろう。

② 同音字の問題：1年の後期、生徒は多く閲読したため、確かに漢字を多く掌握した。しかし書く段階になると、同音字(同じ発音でも異なる意味を持つ字)、音近字(発音が似かよっていても意味が異なる字)、形近字(形が似かよっていても意味が異なる字)等に対して幾らか混同している現象が見られる。例えば、工(gōng)と公(gōng)が同音字であり、清(qīng)と晴(qíng)が音近字であると同時に形近字でもある。武先生が指摘したように、この同音字……等を混同している現象は普通クラスよりも実験クラスの方が深刻である。言うまでもなく、同音字の問題は表音文字の宿命であり、中国文字を拉丁化(ラテン化)する思想、つまりローマ字化する思想は、常にこの問題にぶつかる。即ち膨大な漢字の同音字問題を解決する試みには、未だに成功の萌が見られない。今日に至っても依然として巨大な重荷を抱えているままになっている。というのは、視覚上⁽¹⁵⁾で同音字を区別するには「漢字」より良い道具は未だに見当たらないからである。

五 おわりに

以上上海市における「注音識字、提前読写」教育改革実験校の授業参観、座談会、上海教育局でのインタビューを紹介し、この実験の成果や上海特有の問題点を論じてきたが、いずれにせよ、この教育改革実験の成果はかなり大きいものであることは間違いない。関係者の各位が言った通り、今後も同実験を続けていこう。上海の地域性を考慮に入れ、上海に相応しい教材を完成し、

その成績の良い生徒と成績の悪い生徒の格差を縮めていきさえすれば、今後この実験は更に大きな成果を得ることができるであろう。

(終わり)

〔注〕

- (1) 拙稿『『注音識字，提前読写』の教育実験から見た中国の文字改革』中央学院大学論叢第19巻第2号所収。
- (2) 前掲拙稿。
- (3) 前掲拙稿。
- (4) 筆者は1985年6月下旬に上海市を訪問した後7月下旬に北京市をも訪問した。北京では、先ず北京市教育局を訪れ、蔣覓副外事処長に会って北京の教育改革実験の現状を説明してもらった。次に教育部(文部省)の初教司(初等教育局)李仲漢司長へのインタビューの中から全国の実験の状況がほぼわかった。又李司長の紹介で北京教育学院の王新梅教授を訪ね、同実験の責任者である王教授から見た北京市の実験の現状を2時間ほど聞かされた。最後に文字改革委員会を訪ね、呉潤儀先生へのインタビューの中で違う角度、つまり、文字改革の立場から見た教育改革実験について互いに意見を交換した。
- (5) 1958年に、全国人民代表大会で批准された「漢語拼音方案」が一般には「拼音字母」(ローマ字表記法)と呼ばれている。
- (6) 子音，母音，又両者の組み合わせ，四声……等つまり拼音字母に関する知識。
- (7) 「注音符号」とも呼ぶ。民国時代に公布した漢字音を示すための音標記号。筆画の簡単な漢字に修正を加えたもの。“ㄅㄆㄇ”等24個の声母(子音)と“ㄚㄛㄜㄝ”等16個の韻母(母音)がある。
- (8) ローマ字を主体にした小学生向けの新聞である(文字改革委員会によって発刊されている)。
- (9) 北京語を基礎方言とし、北京語音を標準音とし、典型的な現代口語文による作品を語法の規範とする漢民族の共通語。
- (10) 上海語は呉語区域に属される。それは蘇州を中心とした江蘇，浙江の一部の地方の方言である。
- (11) 拙稿「中国文字拉丁化の理論について」中央学院大学論叢第15巻第2号所収。
- (12) 「蕃茄」ともいう。トマトの意味である。
- (13) 漢語拼音方案が規定した符号(')で、a, o, eの前につけて音節の区切りを示す。
例えば 翻案 fān'àn, 仁愛 rén'ài。
- (14) 前掲拙稿「中国文字拉丁化の理論について」。

- (15) 拙稿「漢字簡略化の歴史的意義」中央学院大学論叢第 16 卷第 2 号所収。